

福島敏夫随筆集「乙戸南雑話【花鳥風月および星・虹を愛でながら】」

主宰論説 61

トロント市およびナイアガラ滝探訪記

昭和57年（1982年）11月、中期留学で、カナダ国立研究機構(NRCC)の建築研究部門で世話になった。オッタワの賃貸マンションから、ほぼ毎日、バスで同研究部門に通い、いろいろな情報交換を行い、研究スタッフ（ラマチャンドラン、アシュトン、リトバン、ボードウィン、クン博士ら）との交流を行って過ごした。日本からは、（株）竹中工務店から、吉川氏が、Research Associate として滞在されており、貴重な研究情報を授受してもらった。日曜・祭日には、カナダ国会議事堂、カナダ国立博物館（恐竜の骨格の標本の展示が思い出される）などを見学し、いろいろな買い物をして過ごした。11月のカナダのオッタワは、当時かなり寒く、気温マイナス5℃になる日はざらで、オッタワ川も凍り付き、スケートを楽しむ人々で満ちあふれていた情景を思い出すようだ。防寒グッズとして、厚靴底のシューズを購入して、雪道で利用していた。貴重な品として、留学を終えたとき、日本に持ち返った。フランスの冬のパリでも利用したが、スーツケースの容量のため、フランスに置いてきてしまった。今にすると惜しい品であった。

ただ、かねてから聞いていたナイアガラのカナダ滝の景勝巡りとトロント市の観光のために、カナダ国有鉄道（VIA Rail Canada）を利用して、1泊2日の予定で出かけた。シーズン・オフではあったが、十分に、その趣を楽しむことができた。幼い息子2人を連れて、老妻と一緒に出掛けた鉄道を使った旅であった。

これは、その時の紀行文である。

1) トロント市観光

トロント市は、カナダ最大の人口を誇る現代都市である。昔の旧友の一人が、トロント大学の2年間の留学をしていた街でもあった。当時世界最高の高さを誇るCNタワーに登った。高所恐怖症の我が身には、大丈夫かなという不安もあったが、高速エレベーターで、展望台までスムーズに行け、空間スペースも広く、十分トロント市の全景の眺望を楽しむ事が出来た。

2) ナイアガラ街と滝の鑑賞

カナダ国有鉄道を利用して、ナイアガラ駅までたどり着いたが、思った以上に時間がかかった。バスを使って、ナイアガラバスターミナルからナイアガラ市街地まで赴いた。シーズン・オフで、遊園地風のイベント会場の主立ったものは、運休していた。11月中旬で、うっすらと雪交じりの天気であったが、タクシーを使って、ナイアガラ街を眺望できるタワーに登った後、宿に着いた。翌日、ナイアガラ滝近くまで行った。滝の裏側から、滝の全景を眺めた後、地上に出て、カナダ滝の轟音とともに流れ落ちる滝の絶景を鑑賞した。他方、ナイアガラ市街地を探索して歩いた。当時、木造5階建てのショッピング・モールがあり、賑わいを見せていた。また、市街地には、特産の土産店が、軒を連ねていた。確か、そこで、ステンド・グラス模様の壁掛けの飾りと、メープル・シロップの壺を購入して、土産品として持ち帰ったと思われる。

スケジュールと予約の関係で、日曜日と月曜日の1日2泊の異例の休日旅行となった。無事、オッタワの賃貸マンションに帰り、死んだように眠った。

NRCの建築部門のチーフ・リサーチャーのラマチャンドラン博士に、日曜日と月曜日の普通は使わない1泊2日旅行について、皮肉を言われた記憶があるが、結果的には、無理に出かけたものの、良い思い出となった。

2026年7月21日正午初稿

あれから約45年が経過した。記憶は薄れつつあるものの、トロント市の町並、オッタワ市の情景、ナイアガラ滝の絶景等が、まぶたに浮かびようである。

自由俳句

轟音と七色の虹流れ滝

2026年7月21日夕方再校

自由短歌

ナイアガラ大きな滝の水柱鮮やかに映える七色の虹

追記：

7月21日夜

その後、ボードウィン博士とは、1991年モンリオールで行われたCANMETとACI共催の「コンクリートの耐久性に関する国際会議」で再会した。優れた世界的な研究者になっておられた。懐かしい思いがした。

2026年7月25日微修正

